

大人でも油断ならない はしか（麻疹）・三日ばしか（風疹）

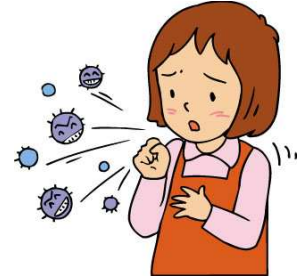
健康エクスプレス No. 66

春から夏にかけて、気を付けたい児童の病気に「はしか（麻疹）」と「三日ばしか（風疹）」があります。実は児童だけでなく大人も注意したい病気なのです。今回は「はしか」と「三日ばしか」をご紹介します。

はしかとは？ 三日ばしかとは？

(1) 「はしか」とはどんな病気？

「はしか」は麻疹ウイルスに感染することで発症する病気です。始めにせき、鼻水、発熱などの症状が現れ、その後、全身に赤い発疹ができます。また、目やにも出てきます。「はしか」の初期には、口中（ほっぺたの裏側）に白色の斑点（コプリック斑）が現れ、これが「はしか」の特徴となっています。風邪と「はしか」を見分けるには、口中をみて、判断できます。



発疹は約3日～1週間程度で消えます。発熱などはおおむね1週間から10日ほどで収まります。しかし、合併症を生じる場合があります。中耳炎、気管支炎、肺炎、脳炎などに至ることがあります。「はしか」は、くしゃみや咳などでの感染（飛沫感染）のみならず、空気中にウイルスが漂って感染（空気感染）することがある感染力の強いウイルスです。そのため保育所・幼稚園・小学校などで一気に広がる可能性があります。児童の場合、学校保健法により、解熱後3日経過後でないとは登校はできません。

(2) 「三日ばしか」とは？

「三日ばしか（風疹）」は風疹ウイルスに感染することで発症する病気です。発熱や発疹など症状が「はしか」に似ていますが、「はしか」より回復するのが早いため「三日ばしか」と呼ばれています。「三日ばしか」も合併症が生じる場合があります。特に風疹脳炎になると、けいれんや意識障害がみられる場合があります。「三日ばしか」は「はしか」より感染力が弱いのですが、くしゃみや咳などでウイルスが飛び散ると、他人に感染します。児童の場合、学校保健法により、発疹が消えるまで登校はできません。

(3) 大人もかかる「はしか」「三日ばしか」

一般的に「はしか」「三日ばしか」は、児童から児童への感染が多くみられます。ワクチンの注射を受けた方や一度かかった方は免疫ができるため、二度かかることが少ない病気です。しかし、最近では免疫力が弱くなっている大人にも発病することがあります。大人がかかると、症状は重くなり、合併症の発生頻度も高い傾向があります。過去には、高校・大学生で流行した例もありました。妊婦がかかると流産や死産になることがあり、特に「三日ばしか」にかかると生まれてくる新生児に障がいの生じる割合が高くなるため、妊娠中の女性は特に注意する必要があります。

治療と予防について

(1) 治療法は？

「はしか」「三日ばしか」とも、特別な治療法はありません。咳、鼻水、下痢、目やになどそれぞれの症状に対する薬を使います。「はしか」「三日ばしか」にかかると食欲がなくなりますが、栄養補給と水分をしっかり取る必要があります。静養中は室内の湿度と温度を少し高めにしておきましょう。



高熱が長く続いたり、水が全然飲めなかったり、咳がひどく呼吸が苦しい場合には医師の診察を受けることが必要です。合併症を防ぐために、症状の変化に注意する必要があります。

(2) ワクチン接種で予防を

「はしか」「三日ばしか」の予防にはワクチンの接種が有効です。現在は「MR ワクチン」という「はしか」と「三日ばしか」の混合ワクチンが利用されています。1才の誕生日経過後に1回目、また小学校入学前に2回目のワクチン接種が望まれます。また、妊娠時への影響を考えると、「はしか」「三日ばしか」にかかったことのない女性も予防接種を受けると良いでしょう。過去にワクチン接種を受けた成人の方でも、免疫が有効でないこともありますので、心配な方は、医療機関で抗体検査を受けましょう。

《皆様の安心と安全のプレイントラスト（専門顧問グループ）》

株式会社ヤシロエージェンシーリミテッド 担当：八城一浩

〒107-0052 東京都港区赤坂3-1-2 TEL:03-3582-4511